

2015 合同教研 テーマ討論④「道徳の“特別の教科”化にどうむきあうか ～私たちの求める道徳教育とは～」

45 名くらいの方々の参加で始まりました。テーマ討論とはいうものの、参加された方々の発言の場をしっかりとつくりたいということで、内藤修司さん（稚内東小学校）の問題提起、谷光さん（北海道子どもセンター）の補足的な提起をもとに、4つのグループに分かれて話し合いをしました。

内藤さんは、「忙しい毎日ですが、子どもの話を炉辺談話できていないのではないかな。どんな困難があっても、方針と方向性を確かめ合っていれば、協力・共同できると校長先生に教えられた。『道徳の教科化』にあたっては特に『評価』に不安の声が多い。目前の子どもを見つめ、子どもの発達、保護者・地域の願いを土台に教育課程をつくること、その中で道徳の教科化に向き合うことが必要だ。この学校・この地域だからできる、子どもたちにより添い支える道徳教育を考えていきましょう」と話し、谷さんは「学力・体力向上をスローガンに、〇〇学校スタンダードとかとゼロ・トレランス的生徒指導で、傷つきの場としての学校が広がっている。子ども・学校の現実から道徳の教科化について語り合しましょう」と補足し、グループでの話し合いに移りました。

全体の交流では、「学力向上運動の中で、きちんと・ちゃんとの徹底で、道徳の教科化のねらいはすでに現実化している」「道徳教育で、本音と建て前を使い分けではなく、本音を聞き取り・語り合える授業実践を創ろう」「道徳教育では、とりわけ『なぜ』を大切にしたい学びや語り合いを大切にしたい」「道徳の時間は、当たり前のことを再確認する場であり、正解をいうと先生が喜んでいて(学生)」「『道徳の教科化』を学校づくりのチャンスにするためには、子どもの姿を大切にしたい職員室での道徳教育の語り合いと実践づくりが必要」などが出されました。

日系ブラジル籍の女性教育研究者のYさんは、「ブラジルでは、20年前の軍事政権崩壊まで、国定教科書を使った道徳があった。今の日本では、『道徳とは何か』は『どんな学校を創るのか』につながっていて、『教育とは』を考える一つのチャンスなのではないか」と話しました。